

## 【隋 想】

# =知= =行= 不一致の話

県普及教育課専技 田 中 文 哉

『理想像をできるだけ実現するために、施策を通じて農村にもってくる。受ける農村の、農民の実態が問題なのである。あってほしい農業像ではあるが、「知」としては有り得ても、実際に「行」ずるのしなければ実現しないのだ。「行」ずる主体は農民であり、農村なのだ。さかんにいわれている将来の農業像への手続きとして、転換期農業とか、農業構造改善とか、主産地形成とかは「知」の段階において存在する。現時点では、部分的には、実践段階にあっても、一般的には「行」の段階ではないのである。「知」と「行」との不一致は今にはじまった話ではない。「知」を「行」ずることのむづかしさは一般的なことなのに、先行する「知」のレベルの高い場合、「行」ずる主体がそのレベルにないならば、たいへんな苦行なのだ。換言すればなかなか実現しないということだ。要求される農業像を受ける農村と農民との間にかかなり遠い距離がある』〔農業と経済第 30 巻第 4 号神崎博愛・農村と農政の食い違い P53 より抜粋〕

古くから知行一致のむづかしさがいわれている。知即ち考えることと、行うこととは大きな差を生ずる場合が多い。神崎氏の説によると、現実の農業や農村を対象に主産地形成や、構造改善のイメージ、つまり「知」の世界を「行」の世界即ち実行に移すとなると、たやすくいくものではない。知を具体的に「行」に表わすのはむづかしいもので、かなりの距離があると断じておられる。

ところで視覚をかえて、一体、ものごとを実行するのは誰かということを考えてみよう。農民は農業を自分の生活手段として実践している。ある人が農家に対して、兼業はいけない、専業で農業をやりなさいと教えたとしても、農家は案外兼業をおしすすめる場合が応々にしてある。このことなどは明らかに「知」としての専業農業の在り方はなる程よいかもかもしれないが、「行」の立場からすると、必ずしも、農業の収入でもってのみ生活を維持する必要は認め

られないことから、とにかく生活のための収入が認められさえすれば、兼業へ走るのはあたりまえであろうと推測される。国民経済的立場から見る場合と私経済的立場から見る場合、見方の相違から来るいろいろの問題が生れる場合もしばしば見受ける。農業によって生計を維持している農家が、案外私経済優先にものごとを考えるのに反し、指導的立場では国民経済を優先し、そのため結果的には、悪いものが、農民になってしまう例もある。

国民経済からみた要求と、私経済の欲求との調整、ここに問題解決の鍵がひそんでいるのではあるまいか。

不言実行という言葉がある。これは知行一致のむづかしさに対し、レジスタンスとして現れた言葉かとも理解される。とにかく見向きもしないで、行に徹するを尊とする意味であろう。

日本農民は、長い歴史的所産としてか、この不言実行型が多い。又この型を農民像の理想？とみたものもあつたかと思われる。「知」と無視した「行」は、思っても寒けがする。理想も夢もない農民、黙々と雨に耕する農民、あたかも農業を勤行かと考えて、行なって来た農民もいふなればあわれである。

理想として描いた農業が「行」として現実に移されれば問題はないが、そういかないところに問題があると同時に、理想を描いてみても仕方がない、単なる知識による近代農業の映像は何の意味もない、要は不言実行あるのみとする考え方にも問題がある。農業政策と農民の行なう農業がよりよい農村社会において、農家の成長となるよう、近代社会における農村社会と農村の繁栄を、農業や農民生活の発展を祈って止まない。知行一致の世界から一致の世界へ、不言実行のみでなく、有言実行のできる世界の創造に懸命の努力を払わねばならない。